

「地球を救う二万五千分の一の責任」

～東京 2020 オリンピック・パラリンピックを通して想うこと～

One Twenty-Five Thousandth of the Responsibility to Save the Earth

—Thoughts From the Tokyo 2020 Olympics/Paralympics



取締役・執行役員
(開発本部本部長)

石川 卓

Takashi Ishikawa

【第32回東京オリンピック、第16回夏季パラリンピック】が、閉会式を終え、1か月半に及ぶ熱戦の幕を閉じました。残念ながら史上最悪とも言えるパンデミックにより、開催が1年遅れ、無観客開催が基本となりました。画面を通しての観戦ではあったものの、アスリートの競技に打ち込む姿勢や背後にある物語り、予期せぬ結末に、世界中の多くの人々が手に汗を握り、数多の感動が生まれたことは、やはりかけがえのない素晴らしい事実だと感じています。オリパラを通じて、途切れることなく歴史をつなぐ、持続可能であることの大切さをあらためて感じる時間でもありました。

昨年の豊田合成技報では、「豊田合成におけるSDGsの取り組み～技術を未来へつなぐ～」をタイトルとした特集を組みました。持続可能な社会を作る上で、2030年に向けた世界目標である17の世界共通のゴールSDGsを達成しつつ、美しい地球環境を守っていくために、長期的に脱炭素社会を目指すことが、世界的な潮流、人類共通の目標となりました。

一方、毎年のように発生する異常気象による災害、一向に収束の見えないコロナ禍による環境・健康意識の高まりなどを背景に、SDGsの理解や定着化は大きく進んだように思います。更に、昨年10月の菅総理（当時）による「2050年脱炭素（カーボンニュートラル：CN）宣言」を契機に、CNに関する記事を目にしない日がないと思える程、あらゆる場で取り上げられるようにもなりました。

現実を目を向けると、地球上で排出される温暖化ガス（GHG）の量は、年間約500億トンと言われ、これを極限までゼロにしなければ温暖化は止まりません。その中で、豊田合成のグローバルなCO₂排出量は年間約200万トン、これは地球上の全排出量の二万五千分の一となります。私たちは地球を救う二万五千分の一の責任を背負っていることをしっかりと認識し、今後の行動を変えていかなければなりません。何億年もかけて蓄積され、地球を構成している化石燃料。産業界は、安価でエネルギーとして使いやすいこの化石燃料にあまりにも多くを依存し、産業活動を行い、産業革命以降の急成長を成り立たせてきました。あらためて、化石燃料依存から脱却し、CNを達成し、持続性社会、循環型社会へ転換していかなければなりません。

豊田合成の事業領域、主力製品群をみても、CNへの対応は、課題山積であると共に、会社の将来に向けた大きな転換期に差し掛かっているといえます。再生エネルギーへの転換、バイオ素材の活用はもとより、素材～廃棄までの一連のライフサイクルアセスメント（LCA）を考慮した全方位での課題の抽出、具現化のシナリオ作成、技術開発等、技術者に求められる課題は尽きません。ですが、私たちが育ってきた頃の豊かな自然環境を守り、次の世代につなげていく使命だと思えば、技術者冥利に尽きるのではないのでしょうか。

今回、特別寄稿としてエネルギー政策の専門家であり、豊田合成社外取締役として、常日頃から多方面でご指導をいただいている山家公雄様に執筆をお願いしました。世界のエネルギー政策、動向から、日本のエネルギー政策のあり方、自動車産業、そして豊田合成の事業戦略に対して、大所高所からの課題提起、ご示唆をいただいております。是非、楽しみつつご一読いただければ幸甚です。